

大学と市民活動

松浦幹司

NPO法人・つくば市民活動推進機構理事・事務局長（略称 つくば-EPO）

1. 寄稿するに至った経緯

このたび筑波大学とは何のゆかりもない私が『筑波フォーラム』の「学外からの眼」に寄稿するに至った経緯を先ず説明する必要がありますかと思えます。所属の「つくば市民活動推進機構」から説明します。

昨今、市民参加型社会への転換が叫ばれています。当地区においても行政のみならず、大学や研究機関、企業等から市民活動への様々な協働の提案がなされはじめています。この協働がうまく実現できるよう、当機構は市民や市民活動団体とつながり、その支援を行いながら、行政や様々な機関との橋渡しを行い、共に豊かな地域社会の創造を目指し、市民の望む、つくばらしい地域社会を実現することをめざしています。そのために

- ①当地区で市民活動を積極的に推進し、市民が「社会力」を身につけること。
- ②市民活動のネットワークを作り、互いの

学び合いから視野を広げ、まちづくりに知恵を出し合い、考え、行動していく基盤をつくること。

以上が目的になっています。

当機構の設立に至る過程では「つくば市民活動センター」の世話人会（H16年解散）が大きな役割を担い、市民活動における中間支援組織のあり方について議論してきました。私もその一員でした。そして筑波学院大学の門脇学長をはじめ筑波の各大学関係者、市民活動家の方々の賛同と合意のもとに、NPO法人をめざす当機構の設立となったわけです。

その中に『筑波フォーラム』の編集委員がおられ、私たちの集まりの場で、「学外からの眼」というテーマで誰か寄稿しませんかという話があり、事務局長の私にお鉢が回ってきた次第です。

2. つくばに住んでみて

私は民間企業の転勤族で平成4年から8年までつくば市に住んでいました。その時は会社と自宅を往復するだけで、市民としての自覚はほとんどありませんでした。

しかし、惹かれるものが何かあったのでしょうか。筑波山以外には何も見えない冬晴れの空、美しい街路樹が並ぶ道路、よく整備された多くの公園は大阪にはないものでした。平成14年6月、定年と同時に再びこちらに引っ越してきました。

当地に来て日がまだ浅い頃に「つくばミュージアム構想」というフォーラムがあり、つくば全体を博物館にしようというテーマで大学の先生、学生、地域の実業家、市民活動家等のお話を聞きました。私には興味深く、新鮮なことでした。隣の人につくばはいいですねと話しかけると「ここは風呂敷を広げる人は多いが結ぶ人がいねえ。この話も同じだよ」と意外に醒めた反応に驚きました。

3年過ぎて、残念ながらあのオヤジさんの言ったことは当たっていたなと思うようになっていきます。

3. 私の「学外からの眼」とは

前述のようにつくば生活も短く、筑波大学と私との接点がない中で、「学外からの眼」など持っていません。大学一般との係

わり合いそのものも、40年余りの在職中、新入社員の受け入れ時に彼らを通して卒業した大学を垣間見てきたに過ぎません。

従ってここでの「学外からの眼」とは筑波大学が対象ではなく、大学一般についての外部の目と受け止めていただければと思います。

4. 学生は大学にとってお客様か商品か

大学には教育と研究の2つの機能があると認識していますが、ここでは教育の場面でお話してみたいと思います。

私はモノ作りの現場に長いこといましたので、モノ作りの考え方で大学教育のことを考えてしまいます。

最近、学生からアンケートを取って要望を聞き、それへの対応策を教職員が学生に返答する大学が多いと聞きました。学生もいよいよお客さんになったのかと私達の時代からすると隔世の感がします。企業では「顧客第一」と言われていますが、お客様は神様であると同時に一面気まぐれな方達でもあります。全ての学生が気まぐれで動く集団とは思えませんが、学生をお客様気分にならせてよいものであろうかと一抹の危惧を感じた次第です。

一方、大学の使命の一つとして社会に有用な人材を教育して世に送り出すことを考えると、学生は大学で作る商品と考え

られないでしょうか。(全ての学生に当てはまることではありませんが)

モノ作りの世界では「必要なものを 必要な時に 必要なだけ作り お客様に届ける」と言う考え方があります。これはジャスト・イン・タイムとも呼ばれ、今や、グローバルスタンダードになりつつあるトヨタ生産方式の基本的な考え方です。私はトヨタの人間ではありませんが、以前、トヨタ関連の方から指導を受けたことがあり、その考え方に共鳴していました。

モノ作りの過程で、この考え方はムダを排除していく判断基準になっています。ムダを排除するために色々な知恵が必要になります。つまり商品は原材料に色々な知恵によって付加価値をつけて完成します。

人を育てるのも、これまで培われた知的資産とそこから発展させた知識で学生に付加価値をつけていく、つまり人の知恵によって教育していると考えれば、商品を作るのと似たようなものだと思っています。

大学の役割を「必要な人材を 必要な時に 必要なだけ教育して社会に送り出す」としたら如何でしょうか。実現性の有無は別にして、商品(学生)作りのために今までとはかなり異なった大学像が生まれるような気がします。

社会という現場に近づくことにより現実が具体的に見えてくると思います。企業で

も現実を見ずして供給サイドからの極め付けで商売し、成功した例は殆どありません。マーケティングの重要性が叫ばれるのも企業の生死がかかっているからです。社会がどのような学生を必要としているかを探るためには、その情報は学外にしかないはずです。大学はこちらが教えを請いに行けば教えてくれるが、大学自ら市場(社会)に降りてきて、対等な立場で社会と向き合うことは少ないように感じています。

活力のある企業は常に市場に目を向け、絶えず改善・改革を行っています。継続してそれが出来るような仕組みを持っています。そして質のレベルを上げる判断基準が「要るものを 要る時に 要るだけ作る」という考え方です。

大学も独立法人となり大学間競争が始まった感がします。伝統の力による差別化は一朝一夕には改まらないかも知れませんが、社会のニーズに応え続ける仕組みを作ることとその質のレベルアップのための判断基準を持つことで大学は活性化し、社会の期待に応えることが出来ると思います。

5. 大学と市民活動

昨年11月に他界した経営学者のピーター・ドラッカーは「現代社会では、もはや直接的な市民性の発揮は不可能である。我々が行なえるのは、投票し、納税するこ

とだけである。しかし、非営利組織のボランティアとして、我々は再び市民となる。社会的秩序・社会的価値・社会的行動・社会的ビジョンに対して、再び直接の影響を与えられるようになる。そして、自ら社会的な成果を生み出すことができる」と10年前の書『すでに起こった未来 変化を読む目』で市民の出番を記していました。

今、国は莫大な借金を背負い込み、その結果、小さな政府に向けての構造改革、三位一体の改革を進めようとしています。さらには避けて通れないグローバル化の進行等で、私たちの生活にも大きな影響が出てくるものと感じています。行政、企業を問わず手の届かないところで顕在、又は潜在化している問題や社会サービスを必要とする事柄が今後益々増える構造になろうとしています。

又、大学と地域社会との関係も変化してきて、大学もより直接的な社会貢献を求められるようになってきました。即ち、行政との提携、色々な分野のNPO・団体等に知的サービスを提供するというのがなされています。

しかし、大学がサービスを提供する一方で、市民からもサービスを受けるというような関係が出来てこそ大学も真に市民権を得たことになるのだと思います。

6. おわりに

TXの開通に伴い、人の往来も増えてきました。今つくばに住んでいる人、これから移り住む人、共につくばに住んでよかったと思うような街にしたいという願いは誰にもあります。

つくばには風呂敷を広げる人は多いと言いました。しかし、このことは他所にないメリットだと考えるようになりました。価値のある風呂敷、そうでない風呂敷もあるかも知れませんが、それを結ぶ場面が数多くあることは恵まれた環境です。風呂敷を結びやすいように整え、結びやすくして市民活動をしている方達に渡していくのが当機構の使命の一つと考えています。

そして、多くの風呂敷が結ばれる過程で市民の社会力がつくことを期待しています。

私共の活動に筑波大学のご協力とご指導をお願いして終りとします。

(まつうら かんじ)